中村俊定文庫
文庫 18
1040

序

いろはとゝのかあり人もたゞ日のたゞきこゝろ
とはあぢはえ人ゐる五尾諸仲光を乃之人
ひとはの案をとりて書くさを序書く
さんてをとりあるべくみをうれバそもむ
より物をれたる事ゞも多うとゝろさて
かゝもとゝかりひうそのまゝよわ光れ云つる

源知助

まさいくたの月日ぞ　さとり
こう　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
こうきたる　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

仙女忘れ給ふ事

爰に仙女あり。名を忘れ給ふといふ。ゑとせ八百と世をひさしくせたらで。そのなりあけることゝ雪女乃ごとし。新東の川の名よ住居て。世をひろく物忘るゝを教へ給ふ。是をなりひ得むとて人集り。物忘をさらひゆく人。礼物と懐よりして来ることゝ。忘れぬ。終よおさぞ。仙女又云ふを忘れぬく捨よ受ぞ。さる八仙女誓ていはく。秋今侍る物忘れ乃すハ。忘恋洗濯のつゝ多百年。又それよみづうゝ立夫を云て教ゆ。今日八先忘恋恋先乃教をゆるゝ。又是をなりひとゝ云ふ八邪よ

華ひきることとりひてぴとりの書紙をかりてよみてく曰。
云れ多くく。そもくく公ハ狗のうちにありと八ゆりぐ。
紙をそのかたちを云らびて起よつけバ紙を云れ。うれよ
つけバこれを云れ。なれてハ母の紙ゆりー附を云れ。せ去
てハ呪ゆりーときを云れ老てハ羽ゆりーむりを云れ。
かく紙云ゆ紙ゆえよ。死なのバいけるゆ乃紙ゆりーを
云れむ。云れバ公ハりとゆ乃紙ゆりーを
紙をのぞみ多つよりゆりて云ゆりーゆと知ばそぐー。紙今
ハ紙ダチ
ゆをゆ云を云ゆく。ゆりーもつむゆりれゆりーこれを
つみくくを廣さらんとおくく八。黄なる平紙ゆまゆ

忘れの秘乃書きにてきかせたまひしにちおち猶忘れ
ずさま人とあはしぬハむ。只忘れやすくと騒くやそと
よみ給り。先節文のむねハかくのごとし。猶忘れんと
おぼさんにハ。目を大きく開きさまへ手を折りてさまかしく
したまへ。これ数乃ひとつなり。猶頂をとりて第一とし。目
をつく第二とし。気をとりて第三とし。その次ハ乳所
より膝に及び。左右の耳肩手脚よりてとらぬとこ
ろ三千所。これをよく一つく忘るゝにハ。まづ頂を忘れんと
するにハ。心を脚におく。目を忘れんとするにハ心ニ膝を
おもふ。此法ハ忘ひ右を忘るゝにハ左をおもひ。左を忘る

にハ右をおもふ。是をよく考へにまいりて漸く身を忘れ
終に秋声を忘るゝに至る也。先今日ハこれまでなりとて
帰りたまへ。猶おそくいひしくおもてみ。その人また業を忘れ
約束を忘れ。病人を忘れ。かるゆゑぞ其後をなおもハんと
おもひて。おそるおそる仙女がりとまいりければ。仙女又朝飯を
忘れて出て來て曰。されバ然忘れたまふや。宵子あさ
くて曰。奇哉くまづ猶三十むかりハたしかに忘れはてう
とふ。仙女曰よく今日まで侍るがひとつのゆゑし
ありとひとく。声をひそめ。援うちみけたるお硯をお
に追ひ出し。戸をさしおさへいそぐ。此表の門を云ふ。

次に夜叉を云る。法華に毒龍を云る。柳に生る戸を云
る。雪傷を云る。樹を云る。代教を云るなり。而るに
千に乃ぶ。秋京乃紫宮殿を法ムして他の赤く或る
ことはさ云まのでし。ひるとあるの代云れ云て代に体
和云れのそとハ為りて。その〳〵眞儀と生る女〳〵の
べるが。その術にうて怪仙人むとらひをとるめ。和尚人
いとゆかしくおりして。日を経〳〵身を経て作意ひ法
るるひられど。始よかれるるの文をあるぞ。仙女が和尚を
まも遠ぶれば或時人居〳〵ざる男をとろう。生れる真実
を教へ久とりバ。仙女声をひそめく教へ曰。ずよかれる

ものをあらば。云れ貝の肉を畳物に交く。成就乃云れ
ものを涙に世く。乞に考く。喰ひたまへ。ちゝバ大云れの先を
となりのむとなり。言葉。和尚その習ひ始るひとぐ
世に云ふと死教のりとおりひ〳〵かバ。彼神文をたゞひがつく
その法を世に廣らさらし。仙女うちたゞちに。
秘法をでに世にみるぞ。法をあぐ。是を授てんと
倒く。仙に和云れ乃術をかゝるとぶ。

古今物語乃紙

○日本武尊妻を娶げんとて。東の国よりぐうの府。伊勢乃
国小倉の崎よいそうて。柳合きこゆめーけり。佩せる所太刀
をひろ松の枝ようけく。修よ忘れ給ひくぐりけりぬ。
評曰これ雷なり

○源義経公の天皇ハ。雄畧三韓川の名よ物語ふ未通女
を激賞ーたまひ。刈大文よめーハまてんぞと。のくまひ。
ちぎらせく。忘れ給ふこと八十年あるりこ。評曰所ある歌
なーー

○あるた作。京の石ろ巡りろる家出く。何京左衛の日

ゆを殺くざるむかー絵りを。もーー。又出くの茶碗をもかろく。
扣られろ秋乃野の虫ハがろよ鳴くとぞいひる。

○祇園といふものくろろ。或人急地ばえんとて。ゆるへ
ろたかろ。史痛のとぐーを三ろくよ。儀ろく猫を
ねろく紙を投急ろーかバ。修よ史つきく猫入りぬ。夜鼠乃
雑のあろくあろる。孫きさろぎく情なんと云ろ。彼
嫌嫌ーてゆぼえろるをハ忘れ給ろ。

○むかー女ありる。ろーを絵く男のろく。ぱ。ろとげんと
いひろ。ろれバ男。

今まで忘れぬハ世もはろーど牧のぐさよぐ年ぬ絵ぬれバ

とりひしく男なのあひてるれまろ

○他の妓家をおほく慶たる人。健志といふ者よあるうく。
今くまろそれをみくおもせたる人閑くまくかるー
ひをこれまろ。浮日これハこそづひしるをゆるーたる
まろん。

○大坂入乃清蓮ハ。わたそろーきまろと云れたり。

○ひろ妊女乃ものくれこれまろがあるーかバ。べられその女ガ心
の眞ーをひろめとゆるーがくく。我まろえんとで往通ひる。

○今ハ昔。畠糸の妊女居。傍の方れよろ。人まるよりとわき
まどひりるありーま。眞乃ものりる人。往妊女ま源

産ひーが別るる時よ泣つるハーく。又あひうんまぐくるどいひけ
ばバ。彼妊女これをみくぞ知りひあなんといまよ懐よ斉よく
うたふりのく居く。是を聞るが。編よ志べてかくれん。
知りひあんとハ云るからよ。ひあきびと云れなよ。とうたひて
あくける。浮日ふるる氏妊女云れるが件を妊うる。

○
釈の意日にあるうて奥玩倫ふ。云れるくふが難除紀ら。芸ええ
く食ふが難めるきかと。一休和尚ま河ひるれバ。一休答へて。何とまら
いるを知りーが云れうとぞ。

○
冬ハ夏を云れ。春ハ冬をとるそ原。

○
浮くハ陣を云れ食をハ醫を云る。浮日ハなるそかくのどー。

○搦戸乃ゐるハそも拍子人多かりき。

○おりふ懸ハよく討れど門のおゝ戸つきたる袴をわ忘れ
ぬさ法るハ。そこ〜拍さらが〜るゝ〜といふ人あり。傳乃人曰
それハ和対乃なるひゆり。俗曰表塗乃ゐ袴を忘れ来れ
や。

○ろろ紀男ゐいひ付られく。ゐゐもあ〜で位ぬるゝ。さ屋をふ〜
あ紀ぐさゐみ忘れバ男ゐ〜くゆくとて。
ろゐゐハ秋もゐひ〜今〜浜ゐ忘るとなるバ神も忘れん
或説作評曰七通八達

○橋聖体旋とふ流人あるゐよく鉛の毒をさるゐを見居りゐる。

ある法ゐきゐ〜あ〜て今釈迦あり。鉛喰むとのゐまふ忘れる
ごゐく調へよと作られバ。体旋芸人まりて今鉛より仏拍ち
く仕りゐるが。俄ゐ年財の程あり。ゐきゐゐ拍忘れつゐるつる
ゐ。大切のたゐまつり拍ゐれバ。鉛つゐゐゐハ許〜たまゐと
ヤくまかんでゐる。評曰よ〜

○或人泥鰌をさゐゐるゐを忘れく。そのゐく湯ゐ入りゐが。
柳をあ〜ゐゐおがゐゐゐ〜かバ。大声を発〜く。柳い〜く
ちびと病ゐあ〜ゐたり。醫作ゐ〜めせとでいひゐる。

○天若者ハといふ作ハ。天照大師作の師侵ゐく。西国ゐ〜でゐゐる
が。六法貴乃ゐのゐゐひゐおそれ。お照姫のゐゐゐひく。

絵よりうどゝやことを云れよろう。

○黄帝赤水のほとりよ遊びく。玄珠と云る。知識とる云くゆゝとゝなかるゝ。象罔といふ人云れ人あり。幸いきて玄珠をとりかゝる。或人評曰智慧ハ是小物

○遺却珊瑚鞭白馬脂不行或評曰遺却かゝるく俗情

○白髭並木宮乃天皇。武烈民ハ云なり所よ云ことゝいふるとよく云れさせのひるる。

○知られる媒彼祝の席よいきくハ海ゝといふ云ことゝ云るれバ。ひけとらとゝ乃ひうりーを。のく云れゝどとれりい居るが。

知識ひとをみく人くまかくんとをる時。付媒秋おもまかりかとゝひかくるを傍の人ゝづきくいくそれゝ麁をはこれバゝと知りひくまかりつあくんといのく云る。

○知りひかさんとをる人ハかゝるゝ見識さだてゝをあくりのゝ。評曰服をかくゝハ樽のうちをみるるりゝをあくハかゝ紀を性くをり。

○女三乃君小侍従よきゝえ乃ふハゝざとよみーかどよりのひーうバゝとも云云あくゝ。さーてさみーを云れよろうと。評曰以云れまれよ柏木の情をこゝーなまゝう。

○殺也年尼佛乃侍弟。維摩乃ゝ第ゝ付。あゝ

りのくをせざりしかバ。舎利弗まづ機たりしに。仏香積国より香積飯をとりよせてくゆをせしバ。舎利弗たちまち食念を忘れり。或人評曰。をかるゝ草の名なへ

○如忘れたる人を。かゝらぬ門あるく。御をこのかよかゝねて あゆむりのく。

○或人山路にあるに。道を忘れてくあらぬ所に迷ひおしかば。日も暮るに。大きなる岩のうつろ木のあるに入くゝづくまり居るに。ぞゝ一あるに人又称ごとく迷ひ来りぬ。彼そとゝいへど乃ち忘れて夜よ来しりのくとりふさゝバとくゝりよひきいまゝくゝ居りとるに。ひとりさまどくゝして来れりなどゝ

いゝハ道を忘れてくゝ夜よ来りといふさゝバこゝなるゝとて今ハ三人まなりてくゝぞりをりるに救いくゝ助けたりとおぼゆるろ。大きなる腹おのそりあり。そのうちにひだりく。その三人おのゝんとまる財。三人とりふ南無三宝とりふ。これ此話のりとゝ。

拙者ろう評曰。在いとひく宝の家よ書かゝたり。

○秋八月むろう。俄よ東風たくゝ吹来くゝ。東の海あれとゝあみしに。船ハ百艘あまり沉よ来づみ。人ハ千人あまり死せるとき。唯一人上船の漂よおのぐつきたる舟ふなりぬ。ぬ海よきけぶりのごとく船乗しくいきかのふとぞ。評曰云る

るが業なり

○みやこ室町あたりに八十そうばかりの法人あり。
此法人舟をかりて、せんだつて、その舟よりめ[illegible]舟のいくさを
なかり[illegible]ぞくたりつべしとて、四ひろれば、舟入家をとこ
ばかりく、日ぶのを七十年繰りハたりつべしといふ。法人ま
て。海ちかくすけあるべしとて、ひろる。後日此法人秋を
ちれるなり。
○寒霧くらく、夕よりいるとのふ。海彼を捕へくるしく、匂ひつる。
ねぐさ[illegible]つるくぶ。嗜んとまるのも、苦まぶ。まるくたく
のぐるのハちれまるう。
○筬紫よりぐるくに住る人乃ぶ。

あ[illegible]ある郡に家住居てみやこ乃ぶ云らくまり
俗曰そもく[illegible]の風俗といふハ、帯ハ[illegible]くむもひ俗くひもび。
髮ハ[illegible]くゆひひきくゆひ。初織又ちく結ー。たとへみやこよ
住をとも。おびゆるひまのハあらじとれん。
○
右近衛将ときこえしのふ。おちこの君乃りとふいきそ。
たのひるふ。俗なん云の[illegible]れ玉なるをとりよ人つかちーた
まバ。をさく云れクひるれバとく。おちこの君
をもまやたぐまそこるべ。俗行乃[illegible]ーみを云るとこバ
○或家に住人の使よいきく。おぐー人のあまるを祐行ひぐま
御方のもぐーをえをるふ。楠正儀が正行よ別れのさまぶ。

長法をつくかきたるふぜをそめくはくくとみをれ
ぬ流ふ。人あまきれば。ものうく使のむすめをやりぬ。さて
ゆるくく問れくおりひをりしまふ。楠多門兵衛と言
ふ。ばしかばかりいしかば。今一度ゆらんと思ひ
されくぞとおりひしかどもさわがず。楠田門兵衛と
いひるやりふふ。人いくく又その返事をのべくかしはる。
使を人乃りとふかりてさるほかり。和歌書をあしく。
今日あり春乃春のぐくもなく。楠田門兵衛と住りたし
といひおしりられば。主人あやしみをひく。何ぞと作者
されり尉。今日なん出使のさたあくさるをぞりしと

やらされば。主人公あるく。他ものよ抱をれもるるば
をとられ。四歳乃嫡よりぞれしうぞれしばと毎のりきあ
れとりて。須弥も加婆抱よ出もくあるる。
○その果となれば。牡頁せたる人。頁る人乃りふたち
かるる。頁る人ハ妨るる。頁る人の浮ふいをひめく。或ハ
あげきたるひハ知り。或ハとびあるひハ打るるハ知る
ぬるるるく。日新いとあわやふさーのぐれば。行使ものど
るるるく。先ハ言れるる新色あり。
○おもてみる長あり。ひとりの母死りるふ。従男ぞもうち家
さかるるおりせよといひれば。ゆるせずとふ。何ぞみと

とゝバがゝとおそ今ハ仏るれとよみつれバ人よるゞげきを
頂ハせくいるよせんといひる。浮世人堂古堀乃かゝ沈
みく堂るくハ云るくひまりといたんや。
○或人云れがゝみといふるハ仏るかゝとひるゝよ人名
ゝく曰云れ紙ゝといふゝるゝと。浮世世の人公何ぞ云れ
紙かゝん。
○ある男如よ拙いひくゝゞゝ仁今歌ハ秋浮よ来く麻
よ門もさゝをゞ仏みといひちぎりて。おその歌ハ云れく
懐人ゝり。如来く門を拙くゝまあきゞりゝれバ。たゞゞか
られゝとおりひくゝそのまに仁かゝんもゝちをくゝく。

隣たる仏。ひる男来かゝたるがみつけくゝそのかゝく
おくゝ行。ひよ妻とゝなくゝ住居ゝり。彼云れるをゝ。
友ゞちゝりしかバ。紅紅くゝ行ゝりるふ。そゝの妻とゝりり
居しかど男云れゝきバ。行ゝもいをゞ。如も又住ゝもいゞ。
その男紅行ゝもいをゞ。浮世罪なり。
○言葉仏食ふ虫のうごめくがゝ。ゝ蝶とゝりくゝ花めゞる
いゞゞかゝたのしかゝむとおりくゝど。彼又ゝうごめる時をバ云れ
たるゝゝゝべし。
○かくゝ姫ハ竹元の家のりふ。武蔵峰あゝりゝしるゝれゝひ
しに。沃より姫ゝ事をおゝしてむゝのゝとゝきゝいくゝ仏の

これを惜しみてあげきまずひしは。天のむらくへば、おそれくといさめて。天の羽衣をうちきせられは。翁をいとおしとおもひつる心さへ忘れにけりと。夜に蘇生する人

評曰。おもふ心はなかなか捨えぬ。さりとて人傍に居てさいふ

○大峯大監太僧百代が許に一とせ忘りて曰。好箇外道

ぬすみ五乃その教れ物にたゞ忘れなくおらぞ来たるといひ捨て

評曰。これおもに物するならんや。

○仏の弟子八百人乃中に。ホタリとかいふ忘人あり。これは利養に貪着して。かろくの経を読むといへども。忘れて示さし

忘れり。評曰。老ひぬけかづき行けば。まず名は吟ぶ。ただ眼のむさひも後の世も忘れはてておもしろやといへれ。

○唐人桐文といふ男の。通詩乃男に向かいては。喜国をも忘年といふは此まつりそ。唐詩の曰い今も手を。桐文又何といふ所のむさ

りく年は忘るといふぞ。唐詩蓋して。此国は忠なりて孝又これに従ふ。君の御年乃かぎる世の小流常によいて忘れた

ふ所に世めぐくは酒香くそのなごみを忘れんとするなり。祝ある

あの又そのむくといへば桐文ゆめく。秋国もむらしはさらむ如ら

しかれは世の中乃せまりたるよう。きさ一年を忘れさりくとて

ぞ忘年会はするなりといふ。評曰評なし。

十三

○狐が女と化して入り来りしをそれこそぬまバ和尚を食ふを
しるべし。さらぬ新よ物語ごとりしく。ぬるの歌又来よといひて後
しるべし。又来ず。今歌もさのごとくしてかへりしるに歌面
ゐ来く相ひしる。さくみるよ狐を窟のこ化く新ハ化モ。
その狐ハよ狐も化モ。それ狐ハ狐ハ狐ハ化モ。
たりる。評曰別てくハ古るるひるん。

○或人曰ずく曰。酒を忘憂の物とハ何をもていふと問ふ人答
ずくいずく。酒を呑バ憂を忘るる故か
人答ハ和ずく答ずく。或辯人評曰。ずくずく又答ずく。
とハ言ハぞや

○あ原人化物とハいふ物なるゆゑかやなりし問ひられバ或人いく
化物ゆゑたるゆをいふと答へず。問ふ人いふ物とひて問ふ。
さく物のひかくみるふうち忘れく。化をもうん物ありるく
数へのひしがくこひかまもふ。物のひ物ざりられバ又ゆきく
化物のゆハ何をかくゆひしと問ひられバ。化物とハ化物
そたるゆをいふとひられバいくさ化物とるゆをたる
むらふとて。問ふく又こ忘れよりり。評曰二人ゆごら化物とう。

○頭陀よ猿久といふ男あるり。是ハ旅ずるゆを牧ずえ
にる

○荷とゆ酒を多く食ハバ。和尚忘れたるといふ或族番ゆ

草を結び人を見るに多くかくせるなり。物をゆくをこのいとは。
よく我物をうち荷ひてくいるなり。俗語に物は忘れ
ていはるるなり。詠曰 山草を多くかひつむとて。
○白雲嵐を荷ひ〜よ。よく馴てくもづりしが。高き嵐よ霧深
かれてくれハ。彼の馴〜人を忘れあるなり。
○雲近く人とちぎりなるよ。男ちぎりを忘れられれバ。
忘らるる身をバ忘れぬ人の命れ惜〜くもあるなり
詠曰 寒深〜
○惟盛卿を御指ゆ〜ひ。吉野山の藤よまゐりれ
そめるよ。雲路をけく業平卿あるなり。

忘れ〜義をとゝ知りふられひきくるを書ふみとけく書をそんとハ
詠曰。寒今集カ古歌よ。忘れつゝとゝをとれハ。ゝハの間ゆかいつ〜
そ〜れなり。
○物忘るる人二人をおねきく。物をく問ゆく陰憑をけるふ。
ひとりの男嵐のあるひてくたるよ。今ひとりよ紙取なる
といふ。その男ふとゝろを探りて。ゆ方も忘れるとふよ。あるい
みるもく代こ物をかゝ〜てそるる。物こひ終りて物ゆ。物よ
ゆくたよ行くらば。時ハ三月あるるあれど。歌合のまうけ
はさうしかバ。陽慶よ水を除くあれバ。天の男うち物
をそく。物きゆ人バこそ。ゆきうハ来りてあれ。をハあるなり〜

暑したる古墳焼うれといひのくちりる。

○わ、猟山よりゆきしる。鹿の射られたるがたちて来る。あの行さ
てをはたのれて死ぬ。そのまくちをとうがらく。鹿をかく。樫
をとうちかけく。人をまぐくちあれたるよ。終よりあれく
ゆよ降りる。その秋乃美よさうるのをんな。さめて行りハ
おなれば。彼ちゆきさうし山よいきてみるよ。他の人をろけく
をうちをそれバあ、び。彼猟さハ美うし、かをりよ。

○ちぐ、乾金よ蔵たう、人祝よをくハれく。世よ和くな
かりぬざう、内ハ和のさたるげ卯、といふのハ忘れをうき
今かくをりてハ又その公をちるくかうと。洋曰ちをみかぐ、と

きんや。

○むう、世粉人あるうに。彼の財今ハ和くんの沢れたれを
、ちをそくありんやとそばくひてのこ居、とぐ。むう、又
人ありて曰。人何ぞ死るんや。吹世乃むう、彼の人うちをれよ。
又秋仏のまくよりるのぐ、。老をとお死ゆ彼の業とりふ。洋曰
たぐめの世粉人ハ和ばくえるをうる。悔の人ハ忘れをうる。

○山よ降りる家。たまく世よ来ハ。彼行るの古今
ぞあいとりふ。とうく、ちうぐをみるよ。人要がりける
来をき人のりてよ、ぐう居て。彼作よ山く降りて。ぐ暑き
ナうぬりしかバ。望れ人忘れ。忘つをて。主居うく。

世人呪ひるのもちゐてどよきことをぞさみられば家をうあ
ーも。とハらんどあつたよ笠ハ三をそれめや。つぎるよおゑひ
てとうをかくてうりる。抱ほけるのをなぐらるよ陰りられば。さハ
ゐぞ其侍よハかんーぬる。なのみてて　さうバ忘れハあるようう
ところとひうんぐ。ーと責られば。笠ハ秋風ーとありひとびて
をりるるよ。ぬとき花ところ又家乃ゆまるくゆるるを。抱さ川辺
さうぐ忘れハ物のおりてかとぬひうんぐ。ひとちをーかりつ
とひよ。家ゆ乃りくもせぐ。ぬ家ハ十日あまり拾ひまるるに
ゆうぐうるさくーおりひくぬ。山の居ハ雪ゆゆ。ぬれうせるんとひ
ぬれバ義。

忘るハこれぞよろーー紀雪も忘れて
とひかーれハゆるぐ
ゆるぐでおくれれ忘れがやーてとひて今ハ追ひあ
うう。洋白今の信ぬおるーハ忘れ新之。
○鳥將ゆるをるに鮮をあるうるよ糯をバ物の殺ゆ川ゆて
行ゆれバゆるまづ姫の紅ハ空を忘れぞて飛めぐう。忘ぐ
して空を忘れくゆ殺ゆとあり。又忘ぐーゆるよゆ殺を忘れ
てお紅ゆとるゆ。さてゆるあびぐよゆ殺を忘れくゆ堀ゆあり。
地を忘れくー糯ゆかる。抱ぐるゆ忘人洋白ゆ忘むぐ。

明和九年辰正月

御茶町通仏光寺上ル丁
吉野屋七兵衛
同町
梅村　宗五郎　梓
堀川通寺辻上ル丁
浅井　庄左門　行

中村安定文庫

寛政三辛亥星歳

九月廿四日書之

田井氏傳之兼

中村史料文書